

## <新刊紹介> 藤田富士男, 大和田茂著 評伝平澤計七

著者	香川 良成
雑誌名	日本文学誌要
巻	55
ページ	94-94
発行年	1997-03-24
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10114/00019940">http://hdl.handle.net/10114/00019940</a>

藤田富士男、大和田茂著

## 評伝 平澤計七

香川 良成

わが国における初の近代的小劇場である築地小劇場を創設した土方与志は、小山内薫に「今日は皆に面白いものを見せてやる」と誘われ、平澤計七の主催する労働劇団の舞台に初めて接した時の感激を、「私にとって、此の夜は晴天のへきれきともゆうべき、驚嘆と感激の一夜であった」「(なすの夜ばなし)」と語っている。

「春に近い或る夕」と言っているのも、それは恐らく一九二二(大正11)年二月末の第二回公演の時であつたと思われるが、その衝撃の深さが察せられる。築地小劇場開場(一九二四年六月)以前の事である。私はこの事実を、一般的な意味での労働者演劇の問題として理解していたが、著者によれば、その活動は、彼が住んでいた府下大島町(現在の江東区亀戸)の労働者街を中心として、そこに「労働者の共生空間を生み出す活動の一環とし

て始めたもので、労働劇団(府下大島町の寄席「五の橋館」が会場だった)はこの共生空間を抜きにしては考えられず、それ故にこそ「計七の芝居は意義があり、活況を呈した」のであるとする指摘には改めて教えられる処が多かった。労働劇団は正にそういう意味での今日で言う処の地域劇団であつたわけである。

この地は彼自身の根拠地であり、彼はここに同時に「現在の生活協同組合の基となった、労働消費組合の共働社を設立し」「その共働社を中心にして大島と月島に労働会館を設けると、労働者の徒弟教育のための文化義塾、労働者に対する日曜労働講座、さらに相談部や自営銀行としての労働金庫までも作り、共同自治空間を広げ」て行く活動を展開してゆくのである。

著者は、このような多面的活動家であつた平澤計七の全体像——一八九九(明治22)年七月、新潟県小千谷の鍛冶職の家に生まれ、一九二三(大正12)年九月、関東大震災時の混乱の中で、いわゆる亀戸事件に巻き込まれ官憲によって虐殺され、三十四才の若さで生涯を閉じるまで

の姿——を、聞き書きや現地調査も含めて実に丹念に精査し、やや伝奇小説的文体も交えて描き出している。巻末の平澤計七略年譜、平澤計七作品目録、主要参考文献(目録)を含めると、今後の平澤計七研究に欠かせない貴重な基礎的研究となっている。

目次はプロローグに始まり、第一章・越後に生まれて、第二章・文学への目覚め、第三章・演劇の師、小山内薫、第四章・知られざる浜松時代、第五章・この腕を見よ、第六章・友愛会幹部として、第七章・労働劇団創立、第八章・村松連隊、第九章・対立を超えて、第十章・追悼、エピローグ、より成っている。平澤の活動を一九一〇～二〇年代といういわゆる冬の時代に置いてみると、それがいろいろの意味で如何に先駆的であつたかを改めて教えられた。今後平澤の作品論・作家論と、それらの歴史的意味の解明を期待したい。

(かがわ よししげ・文学部講師)

▽一九九六年・恒文社・一八〇〇円

△著者・藤田富士男 1918年博士卒

・大和田茂 1981年博士卒